UR都市機構の情報誌 ● ユーアールプレス
UR PRESS
Winter 2012 vol.28

CONTENTS

01 特集対談 Think Now 第9回
子供たちの未来のために
人を結び、世代を結ぶまちづくり
作家 乙武 洋匡
フリーアナウンサー 渡辺 真理

07 特別寄稿
まちづくりにおける
時間と空間
建築家 隈 研吾

11 現場eye
走り続ける老舗美術館
時代を生きる、地域と生きる
山陽新聞編集局文化部記者 岡田 智美

15 TownScope タウンスコープ 第9回
離れてわかった
ふるさとの美しさ たくましさ
―『ちゅらさん』のまち 元気な沖縄 那覇
女優 国仲 涼子

17 The ひと いま、輝くあの人を訪ねて
好きなゴルフを続けたい。
その想いこそが“元気の力”
プロゴルファー 須貝 昇

19 URのしごと
東京スカイツリー®の
まちづくりを提案力と
行動力で力強くサポート

21 URからのお知らせ

22 編集後記

特集対談
Think Now 第9回

子供たちの未来のために

人を結び、世代を結ぶまちづくり

乙武洋匡（おとたけひろただ） 作家
渡辺真理（わたなべまり） フリーアナウンサー

1998年に著書『五体不満足』で日本中の注目を一気に集め、以来そのバイタリティーあふれる行動力で縦横無尽の活躍を続けている乙武洋匡さん。現在は主に教育の分野で〝人とまち〟を結ぶ試みに力を入れる乙武さんに、独自の考え方やパワーの源まで、存分に語っていただきました。

チャレンジ精神の源は失敗を怖れない心

渡辺 乙武さんは、学生時代からまちづくりのための活動に積極的だったと伺っています。きっかけは何だったのでしょう？

乙武 僕が早稲田大学に在学中、近隣商店街の方たちがまちづくり活動を始めたのを知ったことがきっかけでした。ちょうど事業系のゴミが有料化された頃だったので、最初はゴミを減らすためのリサイクル活動が中心だったのですが、そのうちにバリアフリーや地域教育といったことにも取り組もうという動きが出てきたんですね。そんなタイミングのときに彼らと出会って、力を貸してほしいと言われたのがきっかけです。

渡辺 具体的にはどのような活動をなさっていたんでしょうか？

乙武 地域の子供たちと『車椅子探検隊』というイベントなどを開催しました。社会福祉協議会から車椅子を十数台借りてきて、乗ったり押したりしながらまちを歩き回ってもらい、普段の景色や感覚がどう違ってくるのかを体験してもらうんです。そんな活動をずっと続けてきたので、まちや、まちに住む人々のつながりには若い頃から興味がありました。

渡辺 乙武さんには人との出会いを大きな活動へと広げていく求心力がありますよね。普通は出会いがあってもなかなかそうした形には発展させていけないというか、人との境界や活動へのハードルを感じてしまいがちなのに、それをするりと超えてしまう気がします。

乙武 たぶん、失敗に対する怖れをあまり感じないタイプなんだと思います。「石橋を叩いて渡る」ということわざがありますが、僕はそこに橋が架かっているかどうかさえ確かめずに渡りはじめてしまう性格(笑)。先日、現在アメリカを拠点に活動している陸上選手の為末大君とも話したんですが、日本の若者には「やりたいことが見つからない」と言って立ち止まってしまう人が多いんですね。でも本当はやりたいことがないのではなく、失敗に対する怖れが大きいんだと思うんですよ。興味のあるものに出会っても、うまくいかないんじゃないか、自分には向いていないんじゃないかと頭の中で自己完結させて「やらない」という選択をしてしまう。一方で為末君がいうには、アメリカの若者はとにかくチャレンジしてみるそうなんです。もちろん失敗もするんだけれど、失敗は挫折ではなく経験値だと捉えるから、次のチャレンジでは成功への精度が高まると考える。なるほどなと思いました。

渡辺 日本の若い世代の考え方には教育や制度の影響もあるかもしれませんね。ユニークであることがあまり評価されない、ベンチャーの生まれにくい土壌で育つと、どうしても減点法でものを考えるようになる。うまくいけば褒められるというよりも間違えたら怒られるという意識の方が強くなって、萎縮してしまうのかもしれません。

乙武 僕も教育の影響は大きいと思います。子供というのは元来やんちゃで好奇心旺盛ですから、誰でも子供の頃にはとんでもない失敗をやらかすものなんですよ。そのときにチャレンジしたという態度を評価してもらえず、失敗したという結果だけを非難されて育てば「なんだ、せっかく頑張っても失敗すると怒られるんだ。だったら大人に言われたことだけやって

運営にも携わる「まちの保育園 小竹向原」

杉並区立杉並第四小学校での授業の様子

いればいいや」と考えるようになるのはごく自然なことです。そういう意味では、僕はチャレンジして怒られたという経験がないんですよ。なにしろ両手両足がないという衝撃的な姿で生まれてきましたから、親は最初「この子は一生寝たきりだろう」と思ったそうなんです。だから、寝返りを打った、起き上がった、歩いた…と、何をしても褒めてもらえました。そういう加点方式で育てられた経験が「失敗してもいい、やってみることに価値があるのだ」という考え方を育んだのだと思います。

1年365日ずっと元気じゃなくたっていい

渡辺　私、時々思うんですけれど、社会では便宜上、障がい者と健常者という風に物事を分けて捉えることがありますよね。でも物理的な身体は健常でも、目に見えない精神の部分まで一点の曇りもなく健常な人なんているのかな、って。もしいたら、その人の方がいわゆる障がい者よりもずっと希有な存在だと思うんです。つまり人はそれぞれが別の特徴を持った唯一無二の存在であるわけなんだけれど、それでもわかりやすい特徴に反応して好奇の目で見たり同情したりしてしまうことがある。たぶん乙武さんには、チャレンジを褒めてもらえる一方で、そうした特別な視線を注がれた経験も多いのではと思うのですが？

乙武　もちろんまちを歩いているだけでジロジロ見られるし、バスケやサッカーをすれば必要以上に驚かれます。でも、その視線が嫌だとか面倒だと思ったことはないんですよね。というのも僕は子供の頃から目立つのが好きで、人に見られると「おっ、俺、今日も目立ってるな」と、ちょっと嬉しく感じるんですよ(笑)。これはもう持って生まれた性格で、僕にとってはラッキーだったとしか言いようがない。目立ちたがりなだけでなく、負けず嫌いだとか鼻っ柱が強いとか、周りの人が手を焼くようなところが僕にはいくつもあるんですが、この身体にとってそれがすべてプラスに作用していることは間違いないでしょうね。

渡辺　素晴らしい精神と素晴らしい肉体とのベストマッチングが乙武さんだというわけですね。たとえば私もそうですが、表に出る仕事をしていると、時々人の視線に見えない悪意を感じたりしてしまうことがあります。でもその視線が悪意なのか注目なのか、本当のところはわからない。結局、自分自身の心の持ちようなんですよね。

乙武　そう思います。僕も書籍『五体不満足』が出る前と出たあととでは、人の視線に対する気持ちが少し変わりましたから。本を出す前には嬉しかった視線が、本を出した直後は窮屈に感じるようになって。なんというか、監視されているような気分になってしまって、本なんか出さなきゃよかったとしばらく落ち込みました。

渡辺　そんな時期もあったんですね。精神的に辛い時は、どんな風にして乗り越えるんですか？

乙武　部屋のカーテンを全部閉めて、電気も消した真っ暗闇のなかで暗い音楽を聴きます(笑)。中途半端に落ち込まず、それ以上落ちられないところまで意識的に落ちてみるんです。大抵は、それを3日くらい続けると気が楽になってきますね。よく、本当は元気がないのに空元気で頑張ろうとする人がいますが、僕は空元気が一番自分を傷つけると思うんですよ。だから無理に元気になろうとはしません。1年365日もあれば、元気じゃない日があったっていいじゃないですか。常に元気でいなきゃいけない、常に頑張っていなきゃいけないという価値観に縛られるから、自己嫌悪に陥ったり焦りが生まれたりするんですよ。

渡辺　辛さに対しても前向きですね(笑)。でもおっしゃることはよくわかります。小学校の教育目標に「明るく、仲良く、正しく」というのがありますが、そのなかの「明るく」に対して微妙に違和感を感じます。明るい子であることは確かにいいことなんだけれど、それが〝目標〟とされてしまうのはどうなんだろう、と。

乙武　僕もあの「明るく」にはどこか痛々しさを感じます。真意は「心の豊かな人になりましょう」ということだと思うんですが、解釈を間違えている気がしますね。暗くても心の豊かな子はいるわけですから。心豊かという意味では、明るいのもいいけど暗いのもいいよね、という風に多様な価値観を認められることの方が大切だと思います。

教育の場で実現させたい〝恩送り〟とは

渡辺　これまでスポーツや報道などさまざまなジャンルで活躍されてきた乙武さんですが、05年頃からは小学校の教員など教育現場での活動を主体に、昨年には保育園『まちの保育園 小竹向原』を開園されました。いま一番関心のある分野といえばやはり教育ですか？

乙武　そうですね。活動の軸足は教育に置いています。教育に力を入れるようになったきっかけは、僕が20代後半だった頃に、まだ10代前半の子供たちが人の命を奪ってしまうような事件が相次いだことでした。可哀想だな、と思ったんです。もちろん一番可哀想なのは被害者やご遺族の方たちなんですが、僕は加害者側の子供たちも同じように可哀想だという思いを禁じ得なかった。だって犯罪者になってやろうと思って生まれてくる子供なんて一人もいないと思うんですよ。きっと彼らにはそう成らざるを得なかった辛さや寂しさがずっとあって、どこかでSOSも発していたはずなんです。なのに周りの大人は誰も気付いてあげられなかったんだろうか…と考えるなかで、いかに子供の成長に大人の責任が大きいかということを痛感しました。そして周

家や家庭って、いわば
充電器のような
存在だと思うんですよ

乙武洋匡
Hirotada Ototake

1976年東京都生まれ。早稲田大学在学中の98年、先天性四肢切断という障がいとともに生きる体験を綴った『五体不満足』を出版。500万部を超すベストセラーに。以降、報道キャスターやスポーツライターとして活躍し、05年からは教育の分野へも進出。新宿区教育委員会非常勤職員を経て07年より10年まで杉並区立杉並第四小学校勤務。11年、自身の小説『だいじょうぶ3組』の映画化が決定。13年公開予定。

子供たちのチャレンジを応援してあげられる社会を作っていきたいですね

渡辺真理
Mari Watanabe

1967年神奈川県横浜市生まれ。国際基督教大学教養学部卒業後、90年TBS入社。アナウンサーとして『モーニングEye』『NEWS23』など数々の番組に出演後、98年3月に同局を退社。同年5月よりテレビ朝日『ニュースステーション』のサブキャスターに就任、04年の番組終了時までメインキャスターの久米宏とコンビを組む。以降もフリーアナウンサーとしてテレビやラジオの番組に数多く出演。

りからの愛情を一杯に受けて育つという意味では、自分は本当に恵まれていたなと。

渡辺 『五体不満足』には、出産後しばらく我が子に会わせてもらえなかったお母さまが、初めて乙武さんと対面したときに「可愛い」とおっしゃったというくだりがありますね。

乙武 そう、無条件の愛情というのは〝自己肯定感〟を育むことにつながります。自己肯定感というのは、自分は愛されているんだ、大切にされているんだ、存在していていいんだ、と心から感じ、自分自身を大切にできる気持ち。それさえあれば、たとえ手足が4本足りなくたって楽しく生きられるんです。だから今度は、僕自身が上の世代から受けてきた恩を次の世代に返していきたい。それがこういう身体に生まれた僕の使命なんじゃないかと思いました。恩返しというよりは〝恩送り〟という感じですね。

渡辺 つまり乙武さんにとって教育というのは還元でもあるわけですね。小学校から保育園へと、さらに低い年代の子供たちに目を向けたのには何か理由があるんでしょうか？

乙武 小学校の教員をしていたときに、子供にとって一番大切なのはやはり家庭だと実感したからです。たとえば急に忘れ物が多くなったり友達に嫌がらせをするようになったりと行動に変化が出てきた子供の話をよく聞いてみると、家庭内で何か環境の変化があったというケースがほとんどなんですね。大人から見れば「そんな些細なことで？」と思うような変化でも、子供にとっては心のバランスを崩す大きな要因になってしまう。でも現実には安定した家庭ばかりではありませんから、そうした家庭に育つ子供をもサポートしていくためには、もっと地域社会やまち全体で子供を育てていく仕組みを作らなければいけないと思いました。そこで、まずは〝まち全体での子育て〟をコンセプトにした保育園を作ってみようと考えたんです。

渡辺 子供たちが安心して帰れる家庭があって、いくつもの家庭をすっぽり包む温かなまちがある。そんなイメージでしょうか。そのふたつが一体となって、子供たちにとっての柔らかなネットのようになれるといいですね。

乙武 家や家庭って、いわば充電器のような存在だと思うんですよ。家庭でパワーをチャージできるからこそ、また外で元気に活動できるんです。ですから〝まち〟には、そんな風に活力を取り戻せる〝家〟を支える場になってほしいですね。

渡辺 とはいえ昨今ではさまざまな事件の影響を受けて、学校などの教育施設ではセキュリティにも敏感になっています。

乙武 そうなんです。まちに対して開かれた保育園にしていきたいと思っても、社会はどんどん閉ざしていく方向へと動いています。これをどう解決するかが課題のひとつですね。現在は、園の隣にカフェを開いて保護者とともに一般の方にも利用してもらったり、イベントを通して地域の方々との交流を図ったりしながら、園とまちとの結びつきを作ろうと仕掛けているところです。

被災地で得た新たな発見と決意

渡辺 昨年は、東日本大震災の被災地も訪問なさったそうですね。

乙武 被災地では、逆境のなかで前向きに頑張っている人たちとたくさん出会って、とても心を動かされました。同時に、そんな自分にはっとしたんです。「あ、これいつもと逆だ」って。彼らはただ自分や家族、自分のまちのために頑張っているだけで、別に僕たちを感動させようとして頑張っているわけではないですよね。でも僕たちはそんな彼らを見て、勝手に感動したり勇気づけられたりする。いままで僕は「手足がないのに頑張っている乙武さんに感動しました」というような言葉に少し抵抗があったんですが、気持ちが理解できました。これは自分にとってすごく大きな発見でしたね。

昨年訪問した被災地での乙武さん。茨城県北茨城市磯原町にて

渡辺 この震災では「絆」や「忍耐」という言葉がクローズアップされ、いままで見えなかったものも色々見えてきました。私たちはここから何かを生み出すことができるのでしょうか？

乙武 今回の震災では、多くの人が無力感に苛まれたと思います。でも、そうした弱みをきちんと受け入れることも大切だと思うんですよ。強みと弱みの両方を受け入れた上で自分にできることを頑張ることが、迷いのない、元気な将来を築いていくことにつながるんじゃないでしょうか。特に子供たちにはこの先何十年もの人生があるわけですから。彼らが社会に出たときに「あの震災があったからこそ、自分はこういう人生を送れるんだ」と思えるような手助けをしていくことが、僕たち大人の役割だと思います。

渡辺 では乙武さんにとって、今年はどんな年になりそうですか？

乙武 僕は今年で三度目の年男になるんです。そこで年賀状に「天空を力強く駆けめぐる龍にあやかって、自分に制限を設けることなく果敢にチャレンジしていく一年にしたいと思います」と書いたんですね。そうしたらみんなに「いままでも制限を設けてるようには全然見えなかったけど」と突っ込まれちゃいまして（笑）。

渡辺 たぶん日本中の誰もがそう突っ込むと思います（笑）。

乙武 具体的には、一昨年に出した僕の処女小説『だいじょうぶ3組』に映画化の話をいただいて、小説での主人公、赤尾役を演じることになったので、それが大きなチャレンジになりますね。映画という新たな形で、再び教育へのアプローチを図ってみたいと考えています。

渡辺 今日はどうもありがとうございました。

撮影協力●ホテルメトロポリタン 東京都豊島区西池袋1-6-1　http://www.metropolitan.jp